

中学校英語における生徒の見方・考え方を働かせるための 指導方法の研究

— 言語の違いの気付きに焦点をあてて —

教育学研究科 教育実践創成専攻 教育実践開発コース 教師力育成分野 秋山悦子

1. 研究の背景と目的

筆者は昨年度、「特別の教科 道徳」の実践を通して生徒が互いの違いに気付き、互いを理解する一助となる指導方法を検討した。授業実践を通して、多様な価値観を持つ人が集まる学校の中で互いによりよい関係を築くには、相手を知ることが必要だと考えた。また、生徒達は友達関係における理想と現実との違い、他者との考え方の違い、友達の定義の違いに気付くことができた(秋山 2021)。そこで、今年度は多様な価値観を持つ人とのコミュニケーションの促進という研究課題を発展させて、筆者の専門科目である外国語科において追究しようと考えた。

中学校学習指導要領では、「簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」(文部科学省 2018: 10)の育成を外国語科の目標としている。このためには「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理された資質・能力の育成が必要とされており、その際「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせることの重要性を示している(文部科学省 2018: 10)。さらに、この「見方・考え方」は「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を進める際「深い学び」の鍵となることが言及されている(文部科学省 2018: 83)。そして、この「見方・考え方」は、中学校学習指導要領に次のように説明されている。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、外国語によるコミ

ュニケーションの中で、どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのかという、物事を捉える視点や考え方であり、「外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること」であると考えられる。(文部科学省 2018: 10)

つまり、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」とは、他者を理解し自己表現につなぐ役割を果たしており、他者との違いへの気付きは、今期学習指導要領の目指す資質・能力の育成においても重要と考えられる。

そこで、今年度の研究では生徒が他者を理解し、自己表現を目指す学習過程において、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせるための一助となる指導方法を検討することを目的とした。具体的には、OPPの活用を通じて授業改善と生徒の言語の違いへの気付きを促すことを目指して複数の単元に取り組んだ。なお、本研究において他者とは母語である日本語に対する英語と、自分とは異なる多様な価値観を持つ人と定義する。

2. 研究の方法

- (1) 対象校 山梨県公立 A 中学校
- (2) 期間 2021年6月～11月
- (3) 対象生徒 2年生4クラス
- (4) 生徒の実態

全体的には、英語によるコミュニケーション

に対する抵抗感はあまりない。しかし、人前で間違ふことや、できないことへの不安が顕著に見られる生徒もいる。また英語の学力差が比較的大きく、個に応じた指導が必要である。そのため、学習者の実態や教科書が改訂及び変更されたことを踏まえ、既存の知識や考えなどを把握した上で授業を組み立てる必要があり、その際 OPP を活用すれば有効ではないかと考えた。

(5) 研究方法

中学校英語の授業で「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせる力を生徒に育むために、OPP を活用する。堀(2006: 8)によると OPP とは一枚ポートフォリオのシートのことであり「教師のねらいとする学習の成果を、学習者が1枚のシートのなかに、学習前・中・後の学習履歴として記録し、それを自己評価させる」OPPA(一枚ポートフォリオ評価)に用いられるシートのことである。本研究では、以下の観点に留意しながら OPP を活用し、その学習効果を検証したいと考えた。

- ・学習前と学習後の問いにおいて、学習者の既存の知識を把握し、他者がどのように表現するかを示す問いとして授業者が設定する。
- ・生徒の学習履歴への記述から、生徒が他者理解に関する気付きや疑問を授業に反映させ、生徒の主体的な学びを促進する。

3. 授業実践

(1) 生徒に他者理解を促す学習前・後の問いの工夫

堀(2019: 40)はOPPの問いに関わる2つの条件として、その1つに教師が学習者に「これだけはどうしてもわかってほしい」ことを、もう1つは「学習者の学習前の実態を知り、それが学習によりどのように変容したのかを学習後に明らかにすること」とし、問いを同一にすることを示している。

①学習前と学習後を全く同じ問いにした例

(Unit3)

主な言語材料は **be going to** と **will** である。光村図書(2021: 72)には、**be going to** は「話す前から準備を進めていたこと」、**will**

には「その場で思いついたことや時間の経過による変化」という違いがあることが示されている。佐藤(2015: 5)は、「文法的に英語を考えた場合、最も捉えにくいものの一つが時制である」と述べている。また増富(2019)は、**be going to** と **will** の指導が意味の違いを中心に行われる場合、生徒にとって漠然としたイメージとなることを指摘した。

そこで、その時制の違いに対する理解を生徒に促すために生徒に身近な例を用いて **be going to** と **will** の違いを示そうと考えた。

OPP に示した学習前と学習後の問いは、「a と b のような場面を日常生活の中で見つけ具体例を英語で書こう」とした。

- We read a book in the morning every day. Yesterday, I finished reading a book. So, I am going to read a new book this morning.
- In this summer vacation, I will read many books.

しかし、学習前の問いで新しい文法事項を用いて日常生活の場面から具体的な事例を探し、英語で表現することは困難であった。時制の違いを問いに示すことの難しさとともに、OPPの原則である学習前・後の問いの統一にこだわり過ぎてしまったこと、そして説明に使用した英語が生徒の実態に合わせることができなかったという反省から、次時では別のアプローチをとることにした。

②英語の問いへの理解を日本語で補う

(Unit4)

主な言語材料は、目的語である。村上(2011: 24)によると、「日本語では、「～に」「～を」という助詞に注意をすれば2つの目的語は場所が入れ替わってもよいが、英語では語順が逆になると意味が変わってしまい、文法上もSVOの文となり、**to** や **for** などの前置詞が無くては非文となってしまう」とし、習得が困難であることを示した。

そのため、日本語の問いを同時に示して、構文の違いへの気付きを促したいと考えた。ただし、英語の問いは同一のものにした。

図1はUnit4で使用したOPPである。学習前ではI want to buy a key chain.などで答えることができる。学習後には、「誰に」を加えることによって、I want to buy my brother a key chain.またはI want to buy a key chain for my brother.と生徒が自分自身の伝えたい内容を表す表現方法を選択し、記述することができる問いとなった。

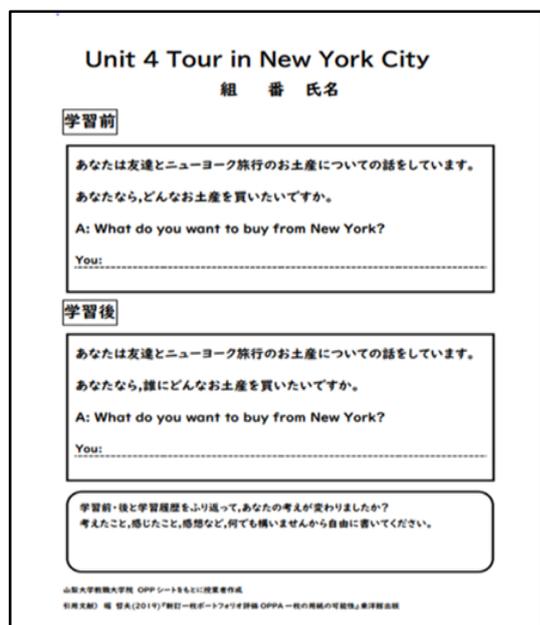


図1 Unit 4 の OPP

③学習後の問いに新しい文法事項を加える

(Unit5)

主な言語材料は、助動詞である。『広辞苑』には助動詞とは「動詞とともに用いて時制・相・法・態などの文法的機能を表す語」(2018: 1475)とある。また光村図書(2021: 129)には、「助動詞が自分の考えや気持ちを表すことを指導し、それぞれの働きの違いに気づかせることが示されている。

Unit5で学習する have to と助動詞の must と should は義務や必要性を表すが、それぞれの語が持つニュアンスの違いを日本語で明確に表すことは難しいと考える。そのため、図2に示したOPPの問いには日本語を示さず、生徒にとって身近な場面から英語そのものを理解させようと考えた。学習前の問いを “What do you pack in your school bag?” とし、学習

後では do を should に変え “What should you pack in your school bag?” としている。この問いの変化によって、学習後には教科書やノート、筆記用具に加え、傘やマスクが必要だと答えることにつながった。

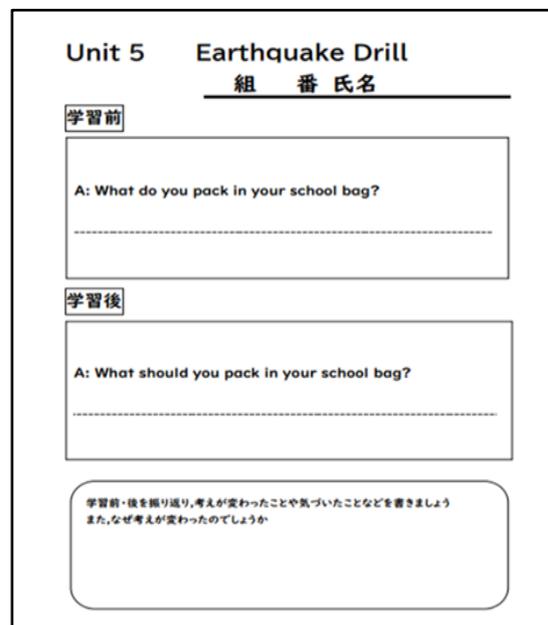


図2 Unit 5 の OPP

④まとめ：学習前・後の問いの工夫

(Unit3~5)

堀(2019)は、学習前の問いは学習後と全く同じものにするとしているが、本研究ではUnit4と5で学習前・後の問いをわずかながら変えており、全く同じ問いにはしていない。それは本研究が生徒の「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせることを目的としており、問いを変えることで言語の違いへの気づきが促されると考えたからである。そのため、学習前は既存の知識で答えることのできる問いに、学習後には新しい文法事項を使って答えることができる問いに変えたが、問いの趣旨を一貫させている。

趣旨を一貫させたことにより、堀(2006)のいうOPPのねらいに示された学習前の既存の知識と学習後の変容を確認しやすくなること、さらに学習中の変容を可視的に確認できることにより、学習の意味を自覚することには近づくことができたと考えられる。

(2) 生徒の学習履歴の記述内容を授業に反映する

回	日付	今日の授業を振り返り、あなたが一番大切なこと と思ったことを書きましょう。	授業での疑問点等 あれば書いてください。
1	/		

図3 OPPの裏面にある学習履歴の一部

山梨大学教職大学院で使用しているOPPの学習履歴には一番大事なことに加え、疑問点を記述する欄があることが特徴である。筆者が実際に教職大学院の講義を受け、その有効性を実感したため、本研究でも採用することにした(図3)。堀(2019: 194)によると、学習履歴に生徒が「授業の一番大切なこと」を書くことによって、「教師と学習者のズレを把握して、次の時間における修正」を行うことや、「学習履歴の内容を授業の中で取り上げ、時を経ることなく学習者の課題に応じていくこと」ができるとしている。

そして研究を進める過程で生徒が任意に書ける疑問点の記載に「他者への気付き」が多く見られることがわかり「一番大切なこと」に加えて、気付きの記載を評価することで「見方・考え方」の支援につなげていくこととなった。

①生徒の疑問点に授業の冒頭で答える

Unit3には、主人公を空港に迎えに来た友人との間で、その後の予定について次のような会話が交わされている。

Grandpa: If you're tired, we can drive straight home.
home.
(もし疲れているなら、車でまっすぐ家に帰れるよ)
(光村図書 Here We Go! ENGLISH COURSE2 p.36)

この授業後の生徒の記述に、「“If you're tired, we can drive straight home.”にはどうしてwillが使われてないのですか」という記述があった。この記述から、次時の授業の冒頭でcanとwillが入った英文を次のように並べて提示し、それぞれの文を比較し、話者のどのような気持ちを伝えているのかを示した。

・ If you're tired, we will drive straight home.
(まっすぐ家に帰るよ)
・ If you're tired, we can drive straight home.
(まっすぐ家に帰れるよ)

日本語の違いからも分かるように、willは話者の意志を伝えるだけであるが、canは相手に提案をし、選択を委ねているということを説明した。この場面では、話者がcanを用いたことにより、話す相手の状況を尊重していることを確認した。

②生徒の反応にこたえて教材を補う

Unit4では、多くの生徒の記述に語順の難しさが書かれていた。先行研究でも示されているように、英語の語順を理解することは日本語を母語とする学習者にとって困難であることが確認できた。

そこでUnit4で学習する「主語、動詞、目的語(人に)、目的語(ものを)、場所、時」の語順を書いたカードを作成し、教科書に挟ませ、しおりとして使用させた。また、語順を上部に予め記入したワークシートを作成し、生徒が語順を整理しながら英語で表現できるように工夫した。生徒の理解度に応じて、何回も繰り返し練習させた。

③言語の使用場面への気付きを発展させる

Unit5の授業後に、「have to はどんな時に使いますか」という質問が書かれていた。生徒の記述には、場面によって使い分けが可能という気付きがあると考えられた。そこで、次時の授業の冒頭で、図4に示したように一般動詞の現在形や既習の助動詞を含むカードを並べて提示し、助動詞を使用する場面の違いについて比較した。

授業後のOPPには「動詞の前につけるcanやwill, mustなどでその人の気持ちがわかることが今まで気付かなかったのでおもしろいなど思った」という記述があった。このことから、助動詞は話者の感情を伝えることができるということ、そして場面によって使い分けが可能であるということを全体で再確認できたと考えられる。

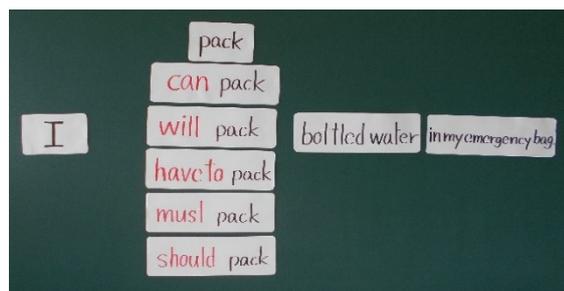


図4 授業の一場面

④実際のコミュニケーションの場面での往還

Unit4 では学習前・後の問いと同じ場面を授業内に設定し、誰にどのようなお土産を買いたいかというやり取りを行った。その授業後に、「ALT の先生が言っていることでわかったところとわからなかったところがあった。全てわかるようにしたい」という記述があった。この記述からは、生徒の英語に対する意欲が高まってきたと考えられたため、生徒が実際に英語を使用する場面を増やそうと考えた。その際、生徒同士だけでなく ALT とやり取りをすることによって、わからないことや表現したくてもできないもどかしさに直面することも見られた。生徒達は OPP に記述したこれまでの学習履歴を見直し、語順や意味を確認しながら自ら進んで言語活動を行っており、実践との往還を繰り返す中で他者への理解を深めていたと考えられる。この単元の振り返りには「相手が自分の発言にどのような反応を見せているかわかった」という聞き手を意識したことが分かる記述があった。

また Unit 5 では「can, will, have to, must, should の違い」という生徒の記述からも分かるとおり、それぞれの語の使用場面に対する疑問が多く上げられた。そのため防災バッグに入れるものについて考える場面では、互いの経験から何が必要かを日本語で話し合う時間を設けた。その後、互いの意見を英語で伝え合った際に OPP の記述を見ながら自分が伝えたい気持ちをより適切に表すためには should を使うべきか、それとも must で表現するべきかと考える生徒も見られた。この単元の振り返りには「助動詞を使うと表現の幅が広がるので伝え

たいことをより明確なニュアンスで伝えられると思う」という記述があり、他者理解への深まりが明確になったと考えられる。

⑤まとめ：学習履歴の記述内容を授業に反映 (Unit3~5)

生徒は、疑問に思ったことやできなかったことを授業内で質問ができない場合にも、OPP には率直に書き記すことができた。また授業内に発言や質問ができない生徒に対しても、OPP を使えばコミュニケーションが可能になる。一方で、生徒の発言が活発であった時には学習履歴を書く時間がなかった。OPP の学習効果を上げるためには授業内に学習履歴を書く時間を取る必要がある、再度授業の流れを検討する課題が見えてきた。

4. 成果の検証

本研究の成果を①実習後に行ったアンケートへの自由記述と、②Unit3~5 で使用した OPP への記述をもとに検証した。

(1) 分析方法

①実習後の振り返りアンケート

ア 調査実施日

令和3年10月26日(火) 27日(水)

イ 調査項目

OPP を使用した授業に関する3つの質問項目に自由記述で回答する無記名によるアンケート調査

ウ 回答数 114名

②OPP における他者理解の記述件数

ア 対象単元 Unit3~5

イ 調査項目

学習履歴と単元の振り返りへの記述

ウ 回答数 123名

(2) 結果と分析

①実習後の振り返りアンケート

(一番大切なことの記述による変容)

4月から「振り返りシート」を使って、毎時間の終わりに「この授業で一番大切なこと」を書きました。「一番大切なこと」を書くことであなたの学習が変わったことがありますか。あるとしたら、どのようなことですか。

表1 一番大切なことの記述による変容 (複数回答)

カテゴリー	回答件数
A 復習	65
B 大切なことを意識	23
C 他者理解に関わる気付き	14
D 学習の可視化	11
E 次時への目標	3
F ない または 未記入	10

表2 生徒の記述

生徒の記述
A-1 見返すときに何がこの授業で大切だったのかという ことが分かるから勉強しようとなる
A-2 家に帰って復習しようという気持ちになれる
B-1 授業の時、一番大切なことは何かと気にして先生 の話聞くようになったし書くようになった
B-2 ただ単に聞き流す授業ではなく、今日学んだこと は何か、自分が知りたいと思ったことは何か、な ど深く考え授業をうけるようになったと思う
C-1 1つの単元、partの中にたくさんの大切なことが あって覚えることがたくさんあったけど、登場人物 <u>は何を伝えたいのか、外国の人はどのように話すの か考えることができた</u>
C-2 質問を書くところを作っていたおかげで気 になったことを気軽に聞くことができるようにな り、理解することができるようになった
D 自分がこの授業で何が分かったかを明確に知るこ とができた
E 次の授業で発音やスペルに気をつけて書いたりで きるようになる

(下線は筆者による)

表2のC-1にある「登場人物は何を伝えたいのか、外国の人はどのように話すのか考えることができた」という記述に他者を知ろうとする視点が表われており、本研究の本質を捉えていると考えられる。また、OPPを復習で使いたいと回答した件数が65件あり、全体のおよそ半数を占めることがわかった。そのことから「授業の一番大切なこと」を書くことによって学習内容が焦点化され、「勉強しよう」「復習しよう」という生徒の自ら学ぶ意欲につながったと考えられる。

(言語の違いへの気付き)

4月からの英語の学習を振り返り、日本語と英語の違いを意識した学習はありましたか。あるとしたら、どのようなことですか。

表3 言語の違いへの気付き (複数回答)

カテゴリー	回答件数
A 語順の違い	37
B 英単語に関するもの	24
C 発音・アクセント・リズム	19
D 主語の有無	14
E 文法全般	11
F ない 又は 未記入	21

表4 生徒の記述

生徒の記述
A-1 人→物の順にしないと意味が伝わらない
A-2 日本語の文と英語の文では、語順が違うのでし りを見て正しい順序で英文を書けるようにした
B-1 英単語は単語の1文字だけでも間違えてしま うと意味が変わる
B-2 単語のニュアンスの違い
C-1 海外じゃ伝わらない言葉があるから間違えな いよう意識する
C-2 knowなどサイレントを含む単語があること
D 英語は主語をしっかり書かなければいけないこと
E 文法が一番違うと思った 文字も違うし、単 元ごとに勉強するのも違うので積極的に復習する ようになった

言語への違いの気付きが126件中105件あったことから、他者(英語)を少しずつ意識し、理解し始めたと考えられる。また間違いを懸念する記述が散見された。間違えることが不安で、学習意欲が低下しないように授業等の環境を整えることが大切だと考える。間違えてもいいから伝えようとする姿勢、他者の話を聞こうとする姿勢を授業で整えていくことが指導者に求められていると考える。

(学習の効力感)

4月からの学習を振り返り、できるようになったことはどのようなことですか。

表5 学習の効力感（複数回答）

カテゴリー	回答件数
A 英単語を書く	53
B 日本語から英文を作成	21
C 文法の理解	19
D 語順の理解	16
E 読解	12
F 音読	12
G リスニング	10
H 自己表現	6
I 英会話	4
J 日常生活	3
K ない 又は 未記入	1

表6 生徒の記述

生徒の記述
A たくさんのスペルを覚えることができた
B 自分で日本語を英文になおすこと
C 疑問文の作り方が苦手だったけどできるようになった
D 語順を考えて文を作る
E 長文を少し読めるようになった
F 文をスラスラ読めるようになった
G リスニングで少し難しい音も聞き取れるようになった
H 自分が伝えたいことができる幅が増えた
I 英語が分かるようになって少し話せるようになった
J 洋楽を聞いていると習った文法や単語に気付き意味が何となくでもわかるようになった

授業を通して、できるようになったこと、わかるようになったことを生徒自身が認識し、記述することにより、自信を持って英語を学習する意欲につながると考える。カテゴリーには分けたが、生徒の記述からはそれぞれが関連し、他者理解を促していると考えられる。また件数は少ないものの、英語による自己表現ができるようになったことが記述に表われている。そのことから、言語活動を通して相手に自分の考えや気持ちが伝わる経験が増えたことが分かる。

②OPPにおける他者理解の記述件数

表7は、学習履歴及び単元の振り返りに記述された他者理解（自分とは異なる多様な価値観を持つ人への気付き）の件数を示したものである。

表7 OPPにおける他者理解の記述件数

単元	他者理解の記述件数
Unit3	16
Unit4	14
Unit5	40

表8 生徒の記述

生徒の記述
(Unit 3) 登場人物が“Im going to stay～.”の発言をする前はどんな状況だったのか分かったし、それを考えることができた
(Unit 4) 語順が違うと誤解をさせてしまうから気をつけるようにする
(Unit 5) 班や人によって考え方が違うことを知った自分では考えられないような意見もあった
(Unit 5) 他の班ででたもので、自分はいらないと思っていたものがなぜ必要なのか、理由を聞いて納得することができた

話者の考えや気持ちを伝えることのできる助動詞を扱った単元では、他者理解に関する記述件数が大幅に増えている。また生徒の記述内容からは、言語活動を通して他者との考え方の違いへの気付きから他者を知ることにつながったことが分かる。

5. 成果と課題

本研究では、生徒が「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」を働かせる一助となる指導方法について、OPPを活用して言語の違いへの気付きからアプローチすることを検討した。

本研究対象生徒の実態を踏まえた際、生徒が「見方・考え方」を働かせるためには、授業において他者との違いに対する気付きの視点を意識させることが重要だと考えた。そのため、OPPの学習前と学習後の問いをわずかではあるが変えたことにより、生徒は言語の違いに気付き他者理解を促進することができたと考えられる。

研究を始めた当初は、筆者が授業改善を目指し授業のねらいを焦点づけるために用いたOPPであった。しかし生徒達がOPPに記述し

た他者への気付きを積極的に評価したことにより、授業において他者との違いに対する気付きが増えることになった。その気付きが一枚のシートに蓄積されたことにより生徒達は実際に英語でやり取りをした際に、OPP に記述した内容を確認しながら他者を知ろうとすることや、自ら進んで英語で話そうとする意欲につながったと考えられる。結果として、言語の違いへの気付きを蓄積した OPP の活用が生徒の「見方・考え方」を働かせる一助となる指導方法となり得たのだと考える。

また成果が得られた一方で、中学校英語の授業に適した学習前と学習後の問いの設定について検討を重ねることや、OPP を書くまでに至らない生徒に対しては、グループで学習する形態をとるなどして、授業内で活躍する場を与えることなどの課題が残った。

今後は本研究の「見方・考え方」を働かせる指導方法を継続するとともに、授業において中学校学習指導要領が示した「コミュニケーションを行う目的や場面、状況など」(文部科学省2018: 10)を明確にし、生徒が本当に伝えたい考えや気持ちを伝え合う言語活動をさらに意識して設定していきたいと考える。

引用・参考文献

- ・秋山悦子(2021)「対話的な学びを通して、友だちとのコミュニケーションを問い直す指導方法とは」令和2年度山梨大学教職大学院教育実践研究報告書
- ・中央教育審議会(2016)「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/01/10/1380902_0.pdf
(最終閲覧日 2022年1月2日)
- ・Close, R.A. (著) 齋藤俊雄(訳) (1980)『ENGLISH AS A FOREIGN LANGUAGE クロス現代英語文法』研究社
- ・堀哲夫(編著) (2006)『一枚ポートフォリオ評価 中学校編』日本標準
- ・堀哲夫(2019)『新訂一枚ポートフォリオ評価 OPPA 一枚の用紙の可能性』東洋館出版社
- ・Long, M.(1991). Focus on Form: A Design Feature in Language Teaching Methodology. In K. de Bot, R. Ginsberg & C. Kramsch (Eds.), *Foreign Language Research in Cross-Cultural Perspective* (pp.39-52). John Benjamins Publishing Company
- ・増富和浩 (2019)「英語の未来表現の指導方法に関する一考察—will と be going to の指導方法を中心に—」『人文社会科学論叢』第28号 pp.47-60
- ・松村昌紀(2012)『タスクを活用した英語授業のデザイン』大修館書店
- ・光村図書(2021)『Here We Go! ENGLISH COURSE2 Teacher's Manual 【3】解説編』
- ・文部科学省(2017)「新しい学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new_icsFiles/afieldfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
(最終閲覧日 2022年1月16日)
- ・文部科学省(2018)中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語編 開隆堂
- ・文部科学省(2018)小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編 開隆堂
- ・村上美保子(2011)「1.4 文法項目と習得の関係」『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』高島英幸(編著)大修館書店 pp.22-29
- ・佐藤秀樹(2015)「(研究ノート) 日本語と英語の違いを意識した英語学習—語順、時制を中心に—」長野大学紀要第37巻第2号 pp.1-12
- ・佐藤臨太郎・笠原究・古賀功(2015)『日本人学習者に合った効果的英語教授法入門—EFL環境での英語習得の理論と実践—』明治図書
- ・新村出編(2018) 広辞苑第7版 岩波書店
- ・高島英幸・根岸雅史・村上美保子(2008年5月7日公開)「中学生の英語学力調査:英語の文構造把握力の観点から」2006年度実績報告書 研究概要
<https://kaken.nii.ac.jp/report/KAKENHI-PROJECT-15330189/153301892006jisseki/>
(最終閲覧日 2021年10月4日)
- ・高島英幸(編著) (2011)『英文法導入のための「フォーカス・オン・フォーム」アプローチ』大修館書店
- ・Wiggins, G & McTighe, J. (著) 西岡加名恵(訳) (2012)『理解をもたらすカリキュラム設計—「逆向き設計」の理論と方法』日本標準